

2020年12月13日 久宝教会 待降節 第3主日礼拝

メッセージ「奇跡の子」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 1章18-23節

アドベント・クランツに3本目の火が灯^{とも}りました。次週にはクリスマスです。昨日は久宝まぶねこども園のクリスマス礼拝がありました。今日はこの後、特別養護老人ホーム・第二好意の庭のクリスマス会があります。例年であれば、クリスマス礼拝には沢山の人が集まってみんなでお祝いしますが、保育園では4・5歳クラスだけで、それも3回に分けて、少人数で行いました。ホームでも入居者のご家族は招待せずに、入居者の方々だけで、またフロアごとに行う予定です。

コロナ禍で「新しい生活様式」が言われる中、これまで出来たことが、同じ形では出来なくなっていることは悲しいことです。ですが、同時にこの困難の中であって、「何が本当に大切なことなのか」という物事の本質が、改めて問い直されているような気がします。

さて今回の聖書の箇所は、イエス・キリストの誕生が天使によって告げられる、いわゆる「受胎告知」と呼ばれる場面でした。『ルカによる福音書』(2章)では、天使ガブリエルによって、おとめマリアに告げられましたが、この『マタイによる福音書』では婚約者のヨセフに対して告知されたと記されています。18節には「母マリアはヨセフと婚約していたが、一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった」とあります。ユダヤ教の律法では、婚約中の女性が婚約者以外の男性と関係を持った場合、それが周りに助けを求めても誰も助けに来てくれる人がいなかった場合を除いては、石打ち刑で死罪とされていました(申命記22:23-27)。しかし、実際に紀元1世紀の頃のガリラヤの村で、その掟が厳密に守られ、村の中で石打ち刑が実際に行われていたかどうかは分かりません。とはいえ、次

第に大きくなってくるお腹を抱えて、マリアはきっと困惑していたのではないかと想像します。

婚約者のヨセフは「正しい人であったので、マリアのことを表^{おもて}沙汰にするのを望まず、ひそかに離縁しようとした」とありますが、ヨセフ自身もマリアのお腹の中の子どもが、自分の子どもではないことを知り、先の律法と照らし合わせて、苦悩していたことが分かります。そんな中、夢に天使が現れて言いました。「ダビデの子ヨセフ、恐れずマリアを妻に迎えなさい。マリアに宿った子は聖霊の働きによるのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」。そしてヨセフは目覚めた後、この天使の言葉通りに、マリアと結婚して、生まれたイエス様を自分たちの子どもとして受け入れて育てたと伝えられています。

クリスマスの絵本や、ページェント（降誕劇）では、「心の優しいマリアさんとヨセフさんに、神様の子ども赤ちゃんイエス様が生まれました。めでたし、めでたし」で終わりですが、現実はそんなに簡単な話ではなかったはず。「聖霊の働きによる」妊娠を、マリアとヨセフの周りの人々はどのように受け止めたのでしょうか。「ヨセフの子ではない子を産んだマリア」は、それが性暴力被害による妊娠と出産であれば、律法上は無罪でしたが、マリアはキズモノにされたのであり、村の中で肩身の狭い思いをしたであろうことは想像に難くありません。そして、そんなマリアと結婚したヨセフもまた「おかしい人」と見なされ、人々から差別されていきました。

『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』に記されているイエス・キリストの誕生物語は、イエス様の死と復活の後、何十年も経ってから執筆されてまとめられました。最初に記された『マルコによる福音書』には記されていません。イエス様の言葉と振る舞いに出会い、感動し、生き方を変えられた人々が、その誕生物語をイエス様の母マリアや兄弟たち、周りにいた村人たちから伝え聞いた話として、口伝で伝えていたのかもしれませんが、そこには「あんなにすばらしいイエス様だから、その誕生も、幼

少期も、神様らしいすばらしいものであったに違いない」という色眼鏡に基づいた創作もあっただろうと思います。『ルカによる福音書』に記されている「神童」としての少年時代のお話などはそうでしょう。しかし、そのような「色眼鏡」を一旦外して、紀元1世紀のガリラヤの村で、歴史的に起こったであろうことに目を向けて見る時、そこに見えて来るのは、生まれた時から神々しく光り輝く神の子ではありませんでした。

婚約・結婚という正式な形ではない非合法の婚外妊娠によって、不安と失望、恐怖の中にあつた二人に対して、神の使いは「この妊娠は、聖霊によって導かれたものだ」と告げました。「聖霊によって身ごもった」という表現は、通常はなかなか妊娠しなかった不妊の女性が、ようやく妊娠した時の感謝の思いを信仰的に表現した言葉です。日本には「子どもは天からの授かりもの」ということわざがありますが、「神様からのお恵みによって、ようやく妊娠できた」、人間的に困難な状況の中でも新しい命を宿すことが出来たという信仰的な表現でした。

そしてマタイは、このマリアの妊娠・出産に対して、預言者イザヤの言葉「見よ、おとめ（若い女性）が身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」（7：14）の成就を見ました。「インマヌエル」というヘブライ語は、そこに説明されている通り、「神は私たちと共におられる」という意味です。

この言葉は、今も昔も多くの人々が考えている「因果論」を真っ向から否定します。「今、自分たちが、罪やケガレ、不幸の中にいるのは、神様から見放されているからだ」。また「自分たちが悪いこと、罪を犯してしまったから、罰が当たって、今の苦難があるんだ」という理解に対して、明確に否を付きつけます。差別と偏見にさらされて、苦しんでいるどん底にいる人々に対して、天使は「神はあなたがたと共におられる」「聖霊が働いて、あなたは男の子を生む」という祝福を告げました。その意味で、イエス様は本当に「奇跡の子」でした。

私たちは、クリスマス物語を語る時、母マリアから生まれたイエス・キ

リストだけを、あまりにも「神の子」「奇跡の子」としてしまっていないでしょうか。日本でもつい100年前までは、乳幼児死亡率は高く、統計に残されていない数も考えると、「七つまでは神のうち」と言って「七五三」を迎えられることを神様に感謝して来た習慣もよく分かります。今では新生児医療も発展して、かつては助からなかった命も助かるようになりました。また不妊治療も進歩して来ています。そのような経験を経て来た人たちにとっては、「奇跡の子」「神様によって授けられ、助けられた命」という言葉は、実感をもって感じられるのではないかと思います。

多くの命が失われて行った悲惨な戦争の中を、奇跡的に生き延びた人がいます。また様々な差別と偏見、格差の中を、押しつぶされそうになりながらも、多くの仲間たちに助けられながら、生き延びた人がいます。その人たちのことを「奇跡の子」と呼ぶ時、今を生きている私たちもまた、このコロナ禍、様々な困難に直面する日々の中を生かされて生きている「奇跡の子」であると呼んでも良いのではないのでしょうか。私たち全ての人々が皆「神様の子ども」であり、また神様によって生かされている「奇跡の子」です。

このコロナ禍の中、世界中で多くの命が死に瀕しています。日本でも新規感染者数は右肩上がりです。重症化する人は少ないとは言え、感染者が増えると重症化する人も増えます。大阪では新しく「大阪コロナ重症センター」が出来たものの、そこに勤務する看護師が大幅に不足しているそうです。また春からずっと続いているコロナ対応に、医療従事者は疲弊し、離職者も相次いでいるとも報じられています。一人一人の命を守るためにも、全ての命を大切にするためにも、例年とは異なるクリスマスや年末年始を過ごす必要があります。

クリスマスに生まれた救い主は、この世界のどん底に生まれました。暗闇の中に生まれた光……、それがイエス・キリストでした。私たちはその神の子イエス・キリストの命を、この身に帯びて、神様と一体となった者として、今日も神様と共に導かれて歩んで行きます。